

国際日本研究の現在—文学・文化・社会

10月 24日 (月) 17:40	リービ英雄 (作家)	翻訳と創作の人生	101教室
11月 12日 (土) 13:00	クリストファー・ ガータイス (ロンドン大学SOAS・ 日本近現代史)	イギリス・アメリカで日本につ いて教えること—なぜ外国で日本 を勉強するのか? <small>※加藤典洋氏の講演会は中止となりました。</small>	大会議室
12月 10日 (土) 13:00	井上章一 (国際日本文化 研究センター・建築史)	ソビエト史学と日本の歴史	115教室
12月 22日 (木) 17:40	ダミアン・ フラナガン (日本文学研究者)	小泉八雲の『心』から 夏目漱石の『心』へ	227教室
1月 10日 (火) 17:40	キース・ ヴィンセント (ボストン大学・日本近代文学)	子規と漱石—俳句と憑依	226教室
1月 17日 (火) 17:40	寺田澄江 (仏国立東洋言語文化大学 INALCO・日本古典文学)	日本文学をフランスで研究 すること、教えること	226教室
1月 21日 (土) 13:00	池上嘉彦 (言語学者)	日本語は<悪魔の言語>という 言説をめぐって—文化的偏見、言語 的相対論、言語の進化との関連での考察	さくら ホール
1月 31日 (火) 14:40	タイモン・ スクリーチ (ロンドン大学SOAS・美術史)	伊勢物語『東下り』 —江戸絵画におけるその政治的意匠 <small>※終了は17:30頃を予定</small>	101教室
2月 1日 (水) 16:00	イリス・ハウカンブ (ロンドン大学SOAS・映画研究)	良い歴史／悪い歴史 —戦時期、映画は過去をどう表象し たか、そのイデオロギー的階級性	101教室

第一線で活躍する国内外の作家・評論家・研究者が、
 知の最前線から「日本」を捉え直し、「国際日本
 研究」の新たな地平を総合的に拓きます。

生誕150周年記念

漱石／子規シンポジウム

2017年 2月11日(土)
 13時半～17時
 於：AA研大会議室

「言葉・物・世界」

柴田勝二
(東京外国語大学)

スティーヴン・ドッド
(ロンドン大学SOAS)
村尾誠一
(東京外国語大学)

王志松
(北京師範大学)
菅長理恵
(東京外国語大学)

時間・内容等
 は変更になること
 があります。
 詳細は、本学
 HPや各回のフ
 ライヤーにてご
 確認ください。

(予定)
 各回
 90分

お問合せ：
 東京外国語大学 国際化拠点室
 042-330-5829
 caas_admin@tufs.ac.jp

第1回 リービ英雄（作家、法政大学教授）「翻訳と創作の人生」

場所：101 教室 日時：10月24日（月）17:40～19:00

連続講演会「国際日本研究の現在」の第一回は作家で万葉集の研究者としても著名なリービ英雄氏を迎えておこなわれた。リービ氏の話の前半部分は日本文学研究者としての来歴に重きを置いたもので、日本文学の翻訳に関する話題に様々に触れられていった。日本文学の欧米圏への紹介はサイデンステッカーやドナルド・キーンらの尽力によるところが大きいですが、その翻訳は必ずしも正確さを尊重したものではなかった。たとえば川端康成の『雪国』のサイデンステッカーによる翻訳では、冒頭の「国境の長いトンネルを越えると雪国であった」という有名な一文の「国境」のニュアンスは訳されておらず、それにつづく「夜の底が白くなった」という文も「The earth lay white under the night sky」と訳されることで、「夜の底」のイメージは消去されている。けれどもこうした十分とは言い難い翻訳によって川端は日本人初のノーベル文学賞受賞者となったのであり、いわば〈誤訳〉によって日本文学が世界化されたというアイロニーが存在する。

リービ氏の専門である万葉集の翻訳についても、奈良時代の日本語を英語に移すことは容易ではないが、原詩のイメージに寄り添うように言葉を補いつつ翻訳をおこなった苦心が語られた。たとえば「真白」という色彩のイメージを生かすために「white, pure white」という直訳ではない英語表現をそれに当てたりする工夫である。総じて20世紀においては、作品を異言語に移すこと自体が重んじられたのに対して、21世紀の翻訳はそれにとどまらず、翻訳される言語の文化をより尊重し、創作の要素を織り交ぜつつ元の作品世界の味わいを極力損ねない形でおこなわれていくべきであることが力説された。

こうした日本文学研究者としての取り組みが語られた後、リービ氏が小説を書くに至った経緯が紹介されたが、氏は1980年代に中上健次に日本語で小説を書くことを勧められ、それにしたがうように書き始めたのだという。翻訳に伴う異言語間の移動はリービ氏の小説の主題をなしているが、ドイツで生活し、ドイツ語でも創作する多和田葉子や在日の作家として異言語、異文化の間でたゆたうアイデンティティーの曖昧さを描いた李良枝などに言及され、生活や表現の場が母国、母語に限定されなくなっている現代における状況が照らし出された。

質問としては、もしリービ氏が英語で作品を書いていたとしたら、これまでに残されている私小説的な色合いとは違う作品になっていたかという問いが柴田教員から出され、それに対して英語で小説を書くという着想がこれまでなかったという答えが返された。また日本語のなかで生きることが表現者としての眼差しにどのような影響を与えたかという問いが学生から出され、それについてはリービ氏はその影響を肯定的に評価しているようであった。会場は大教室が満杯となる聴衆が詰めかけ、たいへん盛況のうちに会を終えることができた。

第2回 クリストファー・ガータイス（ロンドン大学 SOAS 教授）

「イギリスとアメリカにおける日本教育」

場所：大会議室 日時：11月12日（土） 13:30～15:00

連続講演会の第2回はもともと文芸評論家の加藤典洋氏に登壇していただくはずであったが、交渉の不調から登壇を辞退され、代わって急遽現在 CAAS ユニット教員として本学に滞在中のロンドン大学 SOAS のクリストファー・ガータイス氏に依頼し、快諾していただいた。ガータイス氏には深く感謝したい。

講演の前半では勤務先の SOAS での日本研究の歴史が語られた。SOAS で日本語教育が開始されたのは 1916 年で、第二次世界大戦中に軍隊での言語学習を通して大きな飛躍を遂げるようになった。1950～60 年代には歴史学・近代文学・政治科学の研究が導入され、70、80 年代には経済学・社会学が加わった。1980 年代からは漫画、アニメなど日本の現代文化に対する関心が高まってきた流れに応じて、人類学、映画論、テレビ論などを専攻する研究者が SOAS に属することになった。現在 SOAS には 30 人以上の研究者が在籍しており、研究領域の広さではヨーロッパ屈指の機関となっている。毎年約 550 人の学生が日本語クラスに登録しており、SOAS 全学生の 5 人に 1 人が日本に関する授業を取っていることになる。ただイギリスとアメリカを比較すると、日本学を提供している大学の数は学部では 15 対 366、修士課程では 15 対 299、博士課程では 11 対 189 と、アメリカの方が 20 倍程度多いというのが現況である。

イギリス、アメリカで学生が日本について何を学んでいるのかということについては、歴史的な変遷が反映された状況となっている。すなわち、1980 年以前においては日本が古典文化を中心とした学問的関心の対象として捉えられる傾向が強かったのに対して、1980～1995 年頃には日本が経済大国となり、海外への進出を強めていったことを受けて、実利的に有益な領域として社会科学的な観点から日本が眺められることが多くなった。一方 1995 年以降はサブカルチャーやポップカルチャーへの関心から日本への接近がおこなわれることが主流となっていく反面、社会科学などディシプリンの専門性は低下することになった。

現在でも両国における日本研究の需要は弱まっておらず、高い生涯賃金や世界文化の窓口的な存在としての価値から日本への関心もすたれていない。反面大学では研究者の退職後、日本研究ではなく中国とインドの専門家が雇用されるといった変化があり、状況は決して安泰ではないということであった。

急遽設定された講演ということもあって聴衆の数はやや寂しく、質問もあまり出なかったが、講演後の茶話会では参加した留学生から自国での教育の現況に関わる話題が出され、教育の現況と現代の学生の気質をめぐる話が英語で活発に交わされた。

第3回 井上章一（国際日本文化研究センター教授）「ソビエト史と日本の歴史」

場所：115 教室 日時：12月10日（土）13:00～14:30

建築史、文化研究で顕著な業績を残してきた井上氏の講演の表題は「ソビエト史と日本の歴史」という、これまでの氏の仕事とはやや距離のあるものであった。井上氏は、まず勤務先の国際日本文化研究センターの性格について、日本文化を国際的な視野から研究する機関が日本に存在すること自体が、日本文化が真に国際的になっていない証左であるという、やや皮肉な紹介がなされ、それにつづいて本題であるソビエト史と日本史の関連に移っていった。それはソビエトの歴史自体を論じるものではなく、ソビエト時代の歴史観において、奴婢が不在であったという理由から日本の奈良・平安時代が「中世」と規定されていたという話を起点として、日本の歴史区分に対する捉え直しを図ろうとするものであった。従来日本の古代から中世への転換は12～13世紀の、平安時代から鎌倉時代への移行期に求められていたが、井上氏の見方では邪馬台国が成立したとされる3世紀以降を中世として捉えるべきだという。それはヨーロッパの歴史区分において、古代から中世への移行が、ローマ帝国の崩壊からゲルマン民族による諸国家の成立に至る5世紀に想定されており、また中国においても漢の時代が終焉するのが3世紀で、それ以降が中世として見なされるという世界史的な観点を援用すべきだからである。

井上氏によれば、日本の中世が鎌倉時代に始まるとされることによって、相対的に奈良・京都は古代の「腐った都」として位置づけられることになるが、その根底には東京圏を他に優越する文化・文明圏として捉えようとする近代日本の趨勢があるという。こうした、歴史叙述において関西圏を東京圏の下位に置こうとする表現は多々見られ、たとえば「安土桃山時代」という言い方では、豊臣秀吉が実権を握った時代に「大阪（大坂）」ではなく「桃山」という語が当てられていることにも、大阪地方の存在を卑小化しようとする意図が底流している。反面東京大学構内で発見された土器に「弥生」という語が与えられ、それが時代の呼称として流通するに至った背景には、「弥生」が東京の地名だったという事情が想定される。こうした東京・関東偏重主義が近代の趨勢をなし、それが様々な文化現象に影を投げかけている状況に異を唱えていくところに井上氏の立ち位置があることが力説された。

それに対して、古代と中世の境を3世紀に求めるといった〈普遍的〉な時代区分を日本に援用することは、古代文化・文学、中世文化・文学といった形ですでに確立されている文化・文学研究に大きな混乱を招くことになり、現実的な有効性が疑わしいのではないかという質問が友常教員より提起され、井上氏はそれに対して、自分が今日提起したものは従来の歴史区分に対する相対化であり、歴史全般を書き直そうとするものではないという立場を示した。また一般聴衆より、天皇の居所を東京から京都に戻す可能性について質問が出されたが、それについては京都市民は必ずしも歓迎しないであろうという答えが返された。

第4回 ダミアン・フラナガン（日本文学研究者）

「小泉八雲の『心』から夏目漱石の『心』へ」

場所：227 教室 日時：2016年12月22日（木） 17:40～19:10

漱石を世界文学の文脈から読み直す論考で知られる日本文学研究者のダミアン・フラナガン氏の講演は、「心」という同一の表題をもつ作品を書いた小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）と夏目漱石、さらに青年期に漱石に強い感化をもたらした正岡子規を比較しつつ、とくに漱石が八雲と子規の影響をどのように意識しつつ、その圏域から脱して文学者としての独自性を獲得していったかを、新見を交えつつ語るものであった。

ともに帝国大学で英文学を講じた八雲と漱石を比較した場合、八雲が『心』を含む多くの著作で日本人の生活や精神風景を紹介的に叙述したのに対して、漱石はイギリスに二年半滞在しながら、イギリス人の生活を綴った文章はほとんど残していない。漱石の最初の散文作品といえる『自転車日記』は、当時イギリスで流行していた自転車に漱石も取り組んだものの、失敗を繰り返す顛末をユーモアを込めて描いているが、焦点は自転車に悪戦苦闘する自身の姿の戯画的な描出にあり、ロンドンの市民の様相を綴ることにはない。漱石にとって描写行為は外界と交差する自身の意識——「心」——を捉えることにあり、外界の表層的な描出は関心の対象ではなかった。

漱石が絵画に強い愛着を持ち、『草枕』『三四郎』など多くの作品に動機を提供しているのも、その方法と連関している。画家は外界の視覚の様相を描くが、反面そこには必ず画家の意識による対象の歪形が施されており、そこに主題やメッセージが込められていることが少なくない。たとえば『三四郎』はウィリアム・ハントの「雇われの羊飼いに」に触発されており、群れから離れて羊には毒である麦を食べようとする単独者の羊に「迷羊」のイメージが込められているという。一方八雲の日本描写や子規の写生は表層としての現実にこだわるものであり、そこから離れていくことによって漱石は表現者としての独自性を獲得することになった。漱石にとって文学はあくまでも人間の内奥に向かう探索にほかならず、八雲、子規という先行者を〈葬る〉ことが漱石を自律的な表現者に成熟させる契機となった。とくに親友でもあった子規は漱石にとって重荷となった存在で、漱石の中期以降の作品に繰り返し現れる三角関係の構図には、「文学」という「女性」を子規というライバルから奪い取るという企図が込められているという解釈が語られた。

主題が漱石というポピュラーな対象であったこともあって、活発な質疑が交わされたが、漱石と鴎外の関係や『源氏物語』への評価に関する質問が一般聴衆から出され、学生からは当時の文学環境における漱石の位置を訊く質問が出された。また加藤雄二教員から、ウィリアム・ジェームズらの思想的影響を確認する質問が提示された。それらに対してフラナガン氏はあまり多弁ではなかったが、概ね質問者の意図を肯う回答が示された。

第5回 キース・ヴィンセント（ボストン大学教授）「子規と漱石——俳句と憑依」

場所：226 教室 日時：1月10日（火）17:40～19:10

ヴィンセント氏のアプローチは大きく二つであった。第一には、正岡子規と夏目漱石、それぞれの文学的営為を明治中後期におけるホモ・ソーシャリティの現れ方を背景として記述すること。第二には、「詩（俳句）の小説化 [novelizing poet]」という観点から、子規の俳句はいかに漱石の小説の主題となったか、そしてまたその逆に、漱石俳句は子規俳句にいかに関係していたか、それぞれの相互作用を検討することである。

第一について、もともとイヴ・セジウィックが提起した「ホモ・ソーシャリティ [homo-sociality]」概念は、女性嫌悪を構成する男性同士による性差別的な同盟関係を意味する。この概念を用いながら、ヴィンセント氏はそこに時代的歴史的な操作を加味する。明治中後期、すなわち 1890 年代から 1900 年代にかけて、日本など非西洋世界における家父長制のもとでは、ホモ・ソーシャリティは露骨な女性嫌悪的な男性の同盟関係としてだけでなく、特権的でエリート的な男性たちのホモ・セクシュアルな紐帯をも含んでいたということである。これは同性愛が必ずしもタブーではなかった江戸期の文化を継承しているし、近代国民国家のもとで、近代的父長制の確立が徹底し、異性愛主義と同性愛弾圧の制度がつくりだされる 1900 年代以降の政治文化とも異なる。いわばセクシュアリティをめぐる二つの文化のはざまが存在したということである。そしてそこに偶然に生じたのはざまの時期に、子規と漱石の交友の特異性が位置づけられるというのである。

第二については、子規の最後を看取ることができず、罪悪感とメランコリアをかかえこんだ漱石が、その文学作品において、子規の死を色濃く反映しているという仮説を基調とする。その根拠は、子規の俳句と、俳句にとどまらないアナグラムの運動における子規的なものの痕跡が、漱石の営為のうちに見出されることである。まずそれぞれの雅号であるが、「漱石」はもともと子規のペンネームであった。また、Siki と Souseki の二つの語音にはアナグラムの共通性があり、さらにそれは「こころ」における〈K〉という頭文字をとおして、抑圧された主体として登場する。そこには子規に対する漱石の強いメランコリアが存在している。

俳句の小説化については、『三四郎』の冒頭で柿を食べる場面、後半では病人を、柿をもって見舞う場面がある。ここには、子規が漱石とともに過ごした時間の記憶の名残である、漱石の句「鐘つけば銀杏散るなり建長寺」が横たわっているし、もちろんそれを踏まえて子規が作句した「柿食べば」の句がある。ヴィンセント氏は多くの同様の事例をとおして、直示的あるいは暗示的に、漱石と子規がメッセージを交換しあっていたこと、そして子規亡きあとには、漱石は子規の思い出を作品にまぎれこませていたことを示した。それは漱石小説群の創造の源泉を開示するものである。

ヴィンセント氏の一連の研究テーマにおいては、〈クリアな友情〉として示されてきた子規と漱石の関係であるが、本講演はさらにその論拠を作品のクローズ・リーディングをとおして深化させる、刺激的なものであった。

第6回 寺田澄江（日本古典文学）「日本文学をフランスで研究すること、教えること」

場所：226 教室 日時：1月17日（火）17:40～19:10

連続講演会「国際日本研究の現在」の第6回は、フランス国立東洋言語文化大学 INALCO に昨年まで教授として勤務され、現在名誉教授としてフランスにおける日本古典文学研究のリーダーをつとめられる寺田澄江氏を招いておこなわれた。寺田氏の専門分野は古代和歌・平安朝文学であり、和歌の研究とともに、『源氏物語』の翻訳・研究プロジェクトの責任者でもある。

今回の講演は、寺田氏の経験を通して、フランスという文化的にも日本と異なりを見せる場所で、日本の古典文学を研究し、教育することから派生する諸問題を見通す興味深いものであった。

寺田氏の原点は、フランス語に対する違和感にあった。フランス語では日本語で言えば違和感がある「彼は悲しい」ということが普通に言える。すなわち、フランス人にとって、語ることは、自分の考えの提示であり、他人に対して、自分の考えを説明するというのが、第一なのである。実は、このことは、彼の地における学問の風土につながり、それは、日本の学問とかなり相違を見せることになる。フランス人の学術的著述は、分かりきっていることも、自分の言葉できちんと説明し、その上で自分が本当に納得したことを展開させる知的な誠実さにあった。そうした環境の中で、氏の日本古典の学びは始められ、今日に至っている。寺田氏の研究はそうした姿勢の反映したもので、日本で研究する研究者とは異なる独特の視点と明晰さが特色となっている。日本との距離の感覚が研究の原動力となっているという発言もその通りだと思われる。

こうした風土での実際の研究と教育について、具体的に恩師であるピジョー氏の「自分が不思議だと思ったことを手放すな」という教えから始まり、研究仲間との研究の展開、特に翻訳を実践しながらの研究会での体験が興味深く語られた。翻訳は、テキストの重要さをそのまま反映した行為であり、翻訳のためのプロジェクトは惜しげも無く多くの時間をかけ、その中で様々な問題が議論される様子が、具体的に紹介された。特に責任者をつとめる『源氏物語』の翻訳プロジェクトでは、何度も訳文を読み上げながら、問題点を詰めて行くという態度には、襟を正させるところがあった。そうした厳密な学問追求の態度は教育にも及び、基礎をないがしろにしない教育として、実践されている旨も語られた。

最後に翻訳を巡る重要なエピソードが語られた。これは、現代の世界において日本の古典が持つ意味にも直結する。すなわち、ピジョー氏により翻訳された『かげろふ日記』を高等学校の教室で読んだとき、そのテキストを最も深く受け取り、勇気づけられた生徒は、アラブ系の女子生徒だったという。日本古典が翻訳を通して、様々な問題が交錯する現代社会の中で、かくも幸福な出会いをなしたのである。このエピソードへの深い感銘の中で講演は閉じられた。

第7回 池上嘉彦（言語学者）

「日本語は＜悪魔の言語＞という言説をめぐって

－文化的偏見、言語的相対論、言語の進化との関連での考察」

場所：さくらホール 日時：1月21日（月）13:00～14:45

連続講演会「国際日本研究の現在」の第七回は言語学者である池上嘉彦氏（東大および昭和女子大名誉教授）を招いておこなわれた。池上氏はその研究と翻訳の歩みがそのまま20世紀－21世紀の言語学の進展ともいえる、斯界の権威である。

今回の講演は、池上氏の個人的な経験である、南フランスのバイヨンヌのバスク民族博物館を1977年秋に訪問したときのエピソードから始まった。氏はこの折、バスク民族の歴史を説明した絵解きの展示の冒頭に「悪魔サタンはかつて日本にいた。その後でバスクの土地に来た。」と記されていたのを目にし、このような言説はいつから、またどのように生じたのかに関して興味を持つようになったと述べた。

その数年後の1983年、雑誌 *Time* の日本特集号の日本語についての記事の中に「日本語は悪魔の言語である」という言説が16世紀に来日したイエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルによってなされたという記述に接する。しかし、そこにはなぜそのような烙印が押されたのか、その理由についての説明はされていなかった。そこで、東京大学の総合図書館の資料で何か手がかりが見出せないか、調べてみることにした。その結果、もっとも早いもので、1859年ロンドンで刊行された日本に関する書物に、イエズス会の宣教師オヤングーレンが日本語文法をまとめようと試みたが、表記法について説く段階でとても手に負えないと感じ、この複雑さは、日本での宣教を妨げるべく悪魔のなせる業と結論したという記述を見出した。これでひとまず一件落着かと思っていたところ、さらに数年後に、ウンベルト・エーコの著作の中であつてアメリカ先住民の言語も「悪魔の言語」という烙印が押され、すべからずキリスト教を宣布して正すべしという口実のもとに侵略が実行されたという記事に接し、実は日本の場合も笑ってすませるようなことではなかったと悟るに至ったという後日談がつく。

講演の後半では、現在の言語学の観点からして日本語がどのような言語として特徴付けられるか、池上氏の長大な考察の成果を辿る形で話が続けられた。氏は言語と構造的な特徴以上に、言語とかかわり合う人間によって主体的に採られる「認知スタンス」に注目して捉える姿勢を提示し、その点から見て日本語話者は日本語を用いるに際し、「イマ・ココ」への拘りと自己－中心的なスタンスを持つことを述べ、さらにその特徴を有性階層、動詞における直示性、主語省略、人称制限といった道具立てから明らかにした。

質問としては、池上氏が述べた日本語の特徴における授受動詞の主観性について、日本語の歴史を辿ると商業経済の発展につれて贈与者・授与者がともに明示される傾向が指摘され、これと日本語が持つ特徴との関連に関するものがあつた。池上氏はこの問題についてはより多面的な考察が必要となることを述べた。なお会場は100名収容のさくらホールに75人の聴衆が参加し、盛況のうちに会を終えることができた。

第8回 タイモン・スクリーチ（ロンドン大学 SOAS 教授）

「伊勢物語『東下り』と江戸絵画の政治的意匠」

場所：101 教室 日時：1月31日（火）14:20～17:30

スクリーチ氏のアプローチは、京都に匹敵する文学史的伝統の構築という試みが、江戸においていかに実践されたのかということにある。

そもそも1603年に江戸幕府を開いたとき、徳川家康は京の都とその仕法そのものを江戸に移そうと考えていた。江戸は将軍が治める城下町の中心として形成され、多くの革新的な施策が実現されていたが、江戸は絵画や建築はもちろん、詩的な力においても、京の都に匹敵する都でなければならなかった。なによりも京とは、文学の歴史においてその威容を誇っていたからである。

こうしたアプローチにもとづいて注目されるのが、新都・江戸がその詩的アイデンティティを、平安期の作品である『伊勢物語』の領有をとおして構築しようとしたという、視覚的言説的な一連の試みである。

ここで『伊勢物語』が選ばれたのは、それが、江戸がどのような場所となるべきかについて言及している、平安期に書かれたもののなかでほぼ唯一のテキストだったからである。

今日、私たちがそう呼んでいる「平安文学」は、江戸期以前の人々にとってはほとんど知られてはいなかった。宮廷がこの作品を管理下に置いていたし、注釈や指示なしにこのテキストを読むのはきわめて難しかったからである。もちろん多くの場合、「平安文学」は謡曲を通して知られていた。「八橋」の章における「杜若」がもっともよく知られているだろう。謡曲の語りのなかで、「東下り」を始めようとしている「ある男」（在原業平）が言及されている。

しかし、江戸幕府が創建されてすぐに『伊勢物語』が出版され、ひろく読まれることになると、「東下り」こそが、江戸の人々に優越感を与える根拠となった。「東下り」にかかわっては、物語は4つの部分から構成されている。「八橋」から始まり、蔦の細道、富士、都鳥といたる4部である。この物語にもとづいて、江戸の人々は800年前に起きた出来事について、実際の場所を探し求め、名所として愛でようとした。その際には、「東下り」の絵画的伝統もまた重要であった。例えば尾形光琳は京から八橋を描いたことで知られている。しかし、琳派の画家たちは、しばしば江戸で仕事をし、蔦の細道や富士を描いている。都鳥はそれほどではないが、その理由は、おそらくそれが「伊勢」にないからでもあるが、その場所は悲劇の謡曲である「隅田川」に関係している。実際、悲痛な物語を鎮めるために、江戸の隅田川沿いには木母寺が建設され、多くの人々がそこを訪れる名所となった。それゆえ「東下り」の結末は、江戸の人々にとっては穏やかならざるものがあった。しかし、都鳥にかかわっては、浅草の中心にあり、結縁（婚姻）の神である待乳山聖天に近い。そして男たちはそこから吉原に舟を仕立てて遊びにいったのである。こうしたドラマチックな背景を有する物語が、江戸の視覚文化を構成し、同時に京都に匹敵する江戸の矜持を構成していたのだと、スクリーチ氏は結論づけた。また、参照された視覚資料は浮世絵や戯作であり、世俗的な世界で花開いた江戸の視覚文化が、いかに古典世界を〈横領〉していたかという視点も興味深いものであった。

第9回 イリス・ハウカンブ（ロンドン大学 SOAS、東京外国語大学 CAAS 特別招へい講師）
「良い歴史／悪い歴史？——戦時期、映画は戦争をどう表象したか、そのイデオロギー的序列」

場所：101 教室 日時：2月1日（水）16:00～17:30

イリス・ハウカンブ氏の講演は、溝口健二『元禄忠臣蔵』（1942年）と伊丹万作『赤西蠣太』（1936年）の二つの映画をとおして、総力戦期におこなわれた映画産業への国家的介入が、「時代劇」というジャンルと表現においてどのような抗争をもたらしたかを検討することを目的としていた。

戦前・戦中の代表的な映画評論家であった津村秀夫につきのような指摘がある。すなわち「英雄主義を持ち上げているにもかかわらず、当局は歴史的事実に反して突っ走っているときにはそうした映画の制作を禁止したため、二流の「剣劇」映画はほとんど姿を消した。他方、「日本武士道」の歴史が描く典型的な出来事ばかりが映画になった」。

こうした国策的でナショナルな映画には、つぎのような「記念碑的な様式」としての共通性がある。すなわち、「歴史の聖典化」「土着的な芸術の形式やデザインの強調」「技術的なレパートリーとの対応」、そして、ロングテイク、ロングショット、スローなカメラの移動、きわめて儀礼的な中断、アクション、セットのデザインなどである。（「記念碑的な様式は 日本的伝統における文化的遺産を聖餐へと変容させる」Darrell William Davis, *Picturing Japaneseness: Monumental Style, National Identity, Japanese Film*, 1996）。

そして溝口の『元禄忠臣蔵』はまさにその様式に合致してつくられた。それゆえ、「丁寧かつ正確な史実の調査と演出、高貴さと技術によって、武家の精神と生活の表現において、『元禄忠臣蔵』は歴史映画の新局面を開拓した」（文部省 1942）とまで高く評価された。

しかしこれは、津村がやはり次のように指摘したように、戦争の英雄たちを創造する言説と対応していたといえる。「日本人は忠臣蔵の物語を愛している。それは武士道の精神がもっともよく表れているからである。目的のために親、妻、子が犠牲になってもひるむことがない…その精神は今日の日本においても失われておらず、それは真珠湾や東南アジア上陸で散っていった英雄たちにあますところなくしめされている」。

そして実際、映画統制のための法律である「映画法」（1939年）は、映画の目的を「総力戦の準備と動員の一部であること」とし、映画産業にたいする反動的な攻撃（有害な近代性と結合したもの）を遂行し、映画への実質的な国家介入を実現した。

さらにこれに対応するように、「映画は弾丸である」（1941年8月、谷萩那華雄、帝国陸軍報道部長）という発言が公的に主張されるようになる。

興味深いことは、こうした映画の国策化による攻撃の対象が、〈時代劇〉であったことである。伊丹万作が指摘したように、ナンセンスな〈時代劇〉には、権力批判の観点が存在していた。それゆえ、伊丹万作の『赤西蠣太』は、ナンセンスな時代劇であり、現実の秩序を転覆していることで、『元禄忠臣蔵』に対する効果的なアンチテーゼたりえている。

1940年12月から映画は内閣情報局の管理下に置かれ、「国民映画の樹立」は「国民映画」の制作から、「中心的な国民的規範と価値」にもとづく「強い国民精神」へと伸長させられていく。そのなかで、「国民的真正さ」は「過去の正しい理解」（歴史映画）へと展開され、正当化されることとなった。

参照された二つの映画はどちらも片岡千恵蔵の主演である。その意味で『元禄忠臣蔵』の様式と、『赤西蠣太』のパロディ的性格が際立つ構成となっていた。また、講演では触れられなかったが、溝口『元禄忠臣蔵』は、討ち入りシーンを割愛していることでも論争的になってきた映画であった。その理由は溝口のフェミニンな性格に帰されることが多かったが、この講演を踏まえれば、映画法による〈二流剣劇〉ジャンルの抑圧にもとづいていると解釈することが適切であろう。その意味でも、多くの知見と示唆に富んだ講演であった。

生誕 150 周年記念 漱石／子規シンポジウム 「言葉・物・世界」

2017 年 2 月 11 日 13:30～17:15

於：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所大会議室

2016 年 10 月より 9 回にわたっておこなわれてきた連続講演会「国際日本研究の現在—文学・文化・社会—」が完了した後、今年度のシンポジウム・講演会関係のプロジェクトを締めくくる形で 2 月 11 日 13 時 30 分より、アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) 大会議室にて「生誕 150 周年記念 漱石／子規シンポジウム 「言葉・物・世界」」が開催された。登壇者は本学国際日本学研究院から村尾誠一、柴田勝二、菅長理恵の三氏、学外からロンドン大学 SOAS のスティーヴン・ドッド、北京師範大学の王志松の二氏の、都合 5 名で、そこにコメンテーター (質問者) として元朝日新聞社記者のフリージャーナリストで、漱石研究家でもある牧村健一郎氏に加わっていただいた。司会は本学の友常勉氏が務めた。

発表のタイトルは、発表順に以下の通りである。

菅長理恵「文学する武器——子規の俳句革新」

村尾誠一「『竹乃里歌』にみる明治 28 年の子規」

柴田勝二「写生の変容——子規から漱石へ」

王 志松「教養としての「世界名著」——中国で漢訳『我是猫』を読む」

スティーヴン・ドッド「夏目漱石の「こころ」における伝えられぬものを伝えること」

菅長氏は、漱石・子規の生誕 150 周年記念のシンポジウムということで、まずは二人の軌跡が交わる部分、特に、文学的な意味での親交が厚かった二つの時期の紹介をおこなった。一つ目は、明治 22 年である。子規が最初の咯血をし、子規の『七草集』に漱石が漢文・漢詩で批評、漱石の『木屑録』を子規が漢文で批評、さらに、二人が往復書簡で「Idea」と修辞について議論したのがこの年である。この議論で漱石は、「書き散らしてばかりいないで本を読め」と言っており、これに触発された子規が俳書を読み漁るようになり、俳句分類へと向かったのではないかとされた。二つ目は明治 28 年である。心血を注いだ新聞「小日本」の廃刊により、子規は従軍を決意する。子規が大本営のあった広島を発ったのと同時期に、漱石が松山中学に着任。翌月、子規は帰りの船中で大咯血をし、神戸病院に入院する。須磨保養院での療養を経て、故郷松山に帰ってきた子規は、漱石の下宿に転がり込み、52 日間、同居する。この下宿が、即ち、漱石の俳号にちなんで名づけられた愚陀仏庵であり、上京の途中、子規が奈良で詠んだのが「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」の句である。

発表の主題は、子規の「俳句革新」を、主に新聞「日本」を発表の場とした明治 26 年か

ら 30 年までに限り、どのような時代の文脈を受けて、誰に向かって発せられた言説であったかを論じることだった。まとめれば、「(死病による)限られた時間の中で、日本文学の革新者として名を遺すべく、「文学する」「武器」として「明証性」、即ち、「俳句が文学であるための論理」と「俳句分類を下敷きとした豊富な例示」を振りかざし、新聞「日本」という場において、「月並・陳腐」という仮想敵に立ち向かった」ということになる。当時神として祀られていた芭蕉をやり玉にあげたのも、蕪村を称揚したのも、俳句を文学として世に知らしめんが為の戦略であったと考えられる。「明証性」を求めるあまり Intertextuality など、切り捨てられてしまったものもあるが、限られた時間の中で、あえて戦いの場を限定したのも、戦略の一つとみなすことができるということだった。

村尾氏の発表は、子規の歌集『竹乃里歌』全体を注釈した経験を踏まえ、同集の明治 28 年の作品について考えるものであった。明治 28 年は、菅長氏の発表にも見られるように、子規にとって重要な年であったが、『竹乃里歌』に収められた作品についても、そのことがいえることが示された。

特に従軍体験に焦点を当て、先ず和歌について、二つの面が見られることが指摘された。すなわち、述志の具としての和歌という、俳句には見られない文学的な性格が顕在化すること、そして、俳句とも共通する写実主義的な戦場詠が見られ、すでに「写生」的な作風も先取りされていることが、具体的な作品で示された。

さらに、この年の『竹乃里歌』には多くの新体詩が収録されていることに注目し、従軍体験をもとにした「金州雑詩」については、写実主義的な傾向をより追求したものであったが、詩型の長さを利用して、単なる写実に留まらず、叙事、さらには、ドラマ的な叙事に展開する様子が示された。これは、俳句や和歌というジャンルの限界を示し、すでに挫折を経験した小説に繋がる方向であること、そして、その実現は漱石に託されることになるのではないかと指摘もなされた。

その上で、従軍帰途での咯血を保養した、古典の地ともいえる須磨での、古典回帰とも言える和歌にも言及した。こうした文学体験を踏まえた上で、明治 31 年の『歌よみに与ふる書』に示される子規の短歌改革に進んで行くのだが、明治 28 年の作品に見られるような、写実主義的な「写生」に向かいながらもそれ一筋ではいかない作品のあり方は、その短歌改革の中にはらむ、俳句改革とは異なった様々な複雑な位相を解く、ヒントになるのではないかと指摘された。

柴田氏の発表は子規と漱石に共通する主題としての「写生」に焦点を当て、子規の創作に触発され、みずからも俳句作者となった漱石が、子規の表現の理念であった写生という方法をどのように取り込み、消化していったかに焦点を当てたものであった。柴田氏によれば、漱石は俳句の作法を子規に学びながらも、子規とは異質な俳句世界を作り上げており、その背後には漱石独特の自我の強さが想定される。後年小説家として朝日新聞社に入

社した後におこなった講演で、漱石は「我」を通して外部世界である「非我」を捉えることが「作家」の仕事であると述べているが、本来自然描写が大きな比重を占める俳句においても、漱石には自然や外界を眺める「我」の存在感を漂わせた作品が少なくない。

もともと文章表現は「Idea」の表出を本質とすると考え、主体の内面表出を重視していた漱石にとって、17文字で自然や外界を切り取る俳句よりも、内面の思念を自在に散文によって語る小説という形式の方がよりふさわしかったともいえる。一方子規は一時小説の創作を志しながらも成功することがなかったが、高浜虚子に宛てた書簡で、自分は人間よりも「天然」の方が好きだと語っているように、曖昧で不透明な人間の内面の揺れ動きを定着させることが求められる小説は、子規に向けた表現形式ではなかったのかもしれない。けれども外界を客観的に捉える写生の方法は、漱石が小説家となってからも生きつづけていたと柴田氏は述べる。彼が「非我」を表現することが作家の仕事であると考えていたのはその現れで、起点としての「我」の感触を重んじつつ、眼差しを外部世界に向けることが漱石の表現者としての姿勢となっていくが、それは漱石的に消化された写生の方法でもあったという。最後に漱石が「大人が小供を見る眼差し」として写生を捉えるに至った叙述の実例として、『吾輩は猫である』の後半の一節が紹介された。

王氏の発表では、漱石作品の中国語訳が重訳を合わせると70点を超え、もっとも広く読まれている日本人作家であることが紹介された後、『吾輩は猫である』の中国語訳に見られる特徴が述べられた。『猫』の中国語訳は大陸だけで21種類存在するが、その多くは2000年以降のものである。それは当初漱石が『草枕』などによって「余裕派」の作家と見なされたからで、社会批判を含む『猫』は漱石の中国におけるイメージに沿うものではなかった。けれどもその後「批判写実主義」から日本近代文学を眺める観点が一般的となり、『猫』は『坊っちゃん』とともにその代表作としての評価を得ることになった。けれども1980年代以降、改革開放政策によって中国においても「個人」や「人間性」への渴望が高まってくると、漱石については自我を問題化する中期以降の作品が主に読まれるようになったという。

つづいて1990年代以降における『猫』の受容の変化について語られた。この時代に顕著になる教養主義と商業主義の風潮のなかで、『猫』は学校教科書や名著シリーズのなかに組み入れられて流通するようになる。また原文のニュアンスを巧みに生かした于雷や劉振瀾の訳が出るようになると、『猫』の読まれ方も変わってくる。2000年以降の『猫』の受容においては、従来のプチブルジョア批判という階級論的な枠組みを脱して、風刺・笑いの文学として捉えようとする理解が一般的になってくる。読者評においてもユーモアや皮肉たっぷりの世界として『猫』を眺める見方が多く出されるようになる。このようにイデオロギ的に捉えられがちであった『猫』が、次第に表現に即した受容へと推移していく流れがまとめられた。

最後のドッド氏の発表では『こころ』が取り上げられ、ここで「下」巻の主題として描かれるとともに、「上」巻に若い「私」と「先生」の間話題としても現れる「恋」ないし「恋愛」という問題について、時代的な文脈を踏まえつつその実体性と比喩性について考察された。「上」巻で「私」は鎌倉の海岸で出会った中年の男性と親しくなり、「先生」と呼ぶようになるが、「先生」は「私」が自分の元に接近してくることについて「恋に上る階段なんです。異性と抱き合う順序として、まずは同性の私の所へ動いてきたのです」と言う。それに対して「私」は異性との交わりと同性との交わりが性質を異にしていると反論すると、「先生」は両者は同質であると言う。ドッド氏の見方では、この把握の違いに、二人の人物の間の性愛に対する感受性の違いがある。すなわち、同性愛が珍しくなかった時代に青年期を送った「先生」にとって、同性愛と異性愛は連続性をもって捉えられていたが、一回り若い「私」の世代には両者は別個のものとして峻別されるということである。

けれども人々が肌を晒す海水浴場が冒頭の場面選ばれていることに示唆されるように、「先生」と「私」が皮膚感覚的に結びつけられる側面があることをドッド氏は強調する。ドッド氏は Elizabeth Grosz の *Volatile Bodies* の「身体の皮膚が自分の中と自分の外との壁、ではなく、むしろ自分の中と外をコミュニケーションできる膜」であるという一節を引用しつつ、彼らは「皮膚」を介した親しさのなかで関わりあっており、そのなかで伝えることの難しい「心」が伝えられているという。彼らの関係がしばしば同性愛的に捉えられてきたのも、この皮膚感覚的な連携がもたらすイメージにほかならないとされる。そして『こころ』に描かれる彼らの関係性は現在のクイア・スタディーズなどとも深い繋がりを示しているという見通しが語られた。

休憩をはさんで牧村健一郎氏より各パネリストへの質問が投げかけられ、それに対するパネリストからの回答がなされた。

まず菅長氏には、漱石の作品で子規の影響を受けていると考えられるものは何か、漱石の俳句で何が一番好きか、また、子規が誰に向けて「俳句革新」の論を発信したかについて、新聞「日本」の読者に向けてであるとのことだが、漱石に向けてということはないのだろうか、との質問がされた。菅長氏は、漱石の『草枕』を挙げ、漱石は子規を俳句の師として立ててはいたが、漱石もまた一人の名手であると述べた。子規は漱石の俳句を「明治二十九年の俳句界」でとりあげて評しており、特に、斬新さや滑稽味について特色としてあげている。また、漱石は挨拶句の名手であると思ふと述べ、明治 28 年、子規が愚陀仏庵での漱石との同居を終えて上京する際の、二人の贈答句を挙げた。

お立ちやるかお立ちやれ新酒菊の花 漱石
行く我に止まる汝に秋二つ 子規

さらに、子規の言論は、漱石との議論の中で育まれた面があり、二人の共同作業を土台として、世の中に発せられたと考えてよいのではないかと答えた。

村尾氏には、従軍した金州では、子規は同じくその地にいた森鷗外を訪ねているが、子

規と鷗外との関係はどのように考えるかとの質問がなされた。村尾氏は、鷗外と具体的にどのような文学的な会話があったかは明らかではないが、鷗外が俳句に興味を示し、連句を作った事などは了知していると先ずは答えた。しかし、鷗外との関係は様々な側面から、さらに考えてみなくてはならないことは承知しており、今後の課題にしたい旨が述べられた。なお、後に菅長氏から、鷗外の観潮楼歌会との関係はどうかとの指摘もあったが、このことは、子規死後のこととは言え、根岸派の行方として重要な問題となろう。

柴田氏には、俳句と小説を貫く漱石の表現理念である「F+f」が冒頭に置かれた『文学論』と、それが原型的な形を現している、ロンドン滞在時に書きためられたノート（『文学論ノート』）との差違について質問がなされた。それに対して柴田氏は、『文学論』はいわば矛盾の産物であり、文学を非文学的に考えるという企図をもって始められた思想的・哲学的考察を帰国後英文学作品に押し当てたところに成り立っているために、様々な論理的な齟齬が生じているが、その間にも自身の眼差しで外界を表現するという俳句的着想は維持されていると答えた。

王氏には、漱石文学が中国でも読まれつづけ、近年では個人の内面を描く作品が関心を集めているということだが、そうした作品でとくに読まれているものは何かということが尋ねられた。それに対する王氏からの回答は、前期三部作（『三四郎』『それから』『門』）と後期の三部作（『彼岸過迄』『行人』『こころ』）であった。

ドッド氏には、『こころ』には同性愛的な側面が認められるが、『こころ』以外にそうした視点から眺められる作品はあるか、またなぜ漱石は大正3年になって同性愛的な色合いを含む作品を書いたのかということが尋ねられた。それに対してドッド氏からは、この時代にハヴェロック・エリスらの西洋のいわゆる性科学が導入されたことが、日本の伝統的な男色の傾向を問い直させる契機となったことを含めて、日本人の性的なアイデンティティに揺らぎを生じさせていたことが背景にあるのではないかという回答がなされた。ただ『こころ』以外に同性愛的傾向をもつ作品はすぐに思い当たらないということであった。

当日は大学院生と一般客を中心とした130名を超える聴衆があり、4時間近くに及ぶ長丁場にもかかわらず、ほとんどの聴衆が最後まで席を立つことなく耳を傾けていた。発表は大きな流れとしては子規から漱石へと話題が推移していく並びになっていたが、20代の両者の表現から大正期の漱石の代表作である『こころ』までをカバーする内容となっており、日本の近代が確立されていった時代を生きた二人の文学者の個性を捉えることができたのではないかと思われる。